

感性

2025.1.22

本を出したおかげで、たくさんのメールやライン、手紙、電話をいただいた。「おめでとうございます」というフレーズが多い。本人には、そういった自覚がなかったが、本を出版するというのは、そういうことなのだと気づかされる。

ある方から、次のようなメールをいただいた。長文の一部である。

高澤先生の感性が、読んだ方々の人生を照らします。日常の中にある美しいもの、楽しいもの、人の思いや季節の推移、素敵な気づきに包まれました。

ああ、なるほど、そういうことか。自分が書いている文章を価値づけていただいた気がする。キーワードは、“感性”である。辞書によると、感性とは、物事を心に深く感じ取る働き、感受性とある。その通りであろう。だが、今ひとつわかりにくい。感性が鋭い。豊かな感性などと使う。

こういった説明もある。感性とは、様々なものを見たり聞いたりしたときに感じる心の動きや物事からの刺激から生まれた感情を音楽や絵などで表現する力のことを指す。こちらのほうが、しつくりくる。

福島民友新聞に月に一度のペースで「隨想」を執筆している。こちらも、毎回、コメントや感想などをいただいている。そこで、感じることがある。それは、一つの同じ文章でも、人によって感じるポイントが違うということである。三者三様である。だから、おもしろいし、勉強になる。

なぜそうなるのか。それは、その人の感性からきているからではなかろうか。絵画作品や音楽、映画、小説などでも同じだろう。人によって、感じ方が違うし、見るポイントが変わってくる。有名な絵画やクラシック音楽になると、感じ方にも正解のようなものがあるのではと思ってしまう。それがわからないと、その作品を理解していない。とどのつまりは、絵や音楽がわからないとなってしまうよう思う。

私のエッセーは違う。誰でも自由に、自分の感じ方で味わってもらえるものである。教員の方と保護者の方では、見方や感じ方は違うだろう。小学生や中学生は、どのへんに反応するのだろうか。一般的の読者は、どのような感想をもつんだろうか。機会があれば、聞いてみたい。そして、常に読者を意識しながら文章を書いている我が身の参考にしたい。

文章をたった一人に向けて書く。読む人がそれを自分のことと思ってくれたときに、その人に届いたということになる。『人生は、燐燐と 校長室だより 100選』も福島民友「隨想」も、読んでくれる方に届いているだろうか。すべては、感性にかかっている。